

佐取純子モダンバレエスタジオ創作舞踊公演

LEGENDS「義経になった男」より

■原作／平谷美樹
■構成・振付／佐取純子

■原作者・平谷美樹氏お話
■短編映画「義経北行」上映
■創作舞踊

義経・沙棗役／中川雅寛



佐取 純子

平泉藤原氏の滅亡と源義経の影武者・沙棗の生涯を描いた伝奇的な歴史小説を現代舞踊によって舞台化した意欲作！

■中川雅寛プロフィール
1993年歌舞伎俳優・坂東玉三郎主催の劇団「東京コンセルヴァトリー」に所属し、日本舞踊を中心に舞台全般を学ぶ。現在、仙台市一番町にて日本舞踊の動きを取り入れた「日舞エクササイズ」を主催。NHK仙台放送局「ひるはび」体操コーナーに出演中。

●とき

7/6 SUN.

●開演／16時30分（開場／16時00分）

●ところ

イズミティ21〈小ホール〉

仙台市営地下鉄南北線泉中央駅下車、北3番出口をご利用ください

- 主催／佐取純子モダンバレエスタジオ
- 後援／河北新報社 TBC 東北放送
- 構成・振り付け／佐取純子
舞踊／佐取純子モダンバレエスタジオ
監督／高橋清博
照明／志賀照明研究所 音響／濱田一郎
衣装・デザイン／光尾 秀 放送／高杉悠珠子

●料金／前売り・当日ともに **2,500円**
プレイガイド／仙台三越・藤崎・エスパル仙台パルショップ
ホームページ／<http://satori-modern.jp>

●お問い合わせ先／TEL022-712-1730・022-262-0729(スタジオ J-1)

●公益財団法人 宮城県文化振興財団助成事業 ●公益財団法人 仙台市市民文化事業団助成事業

小説「義経になった男」より

拙著【義経になった男】は、平安時代の末期、平泉藤原氏の滅亡と義経の影武者となった沙棗という男の生涯を描いた小説です。かつて河北新報の朝刊に【沙棗——義経になった男】というタイトルで連載された作品ですから、覚えておいでの方もいらっしゃると思います。その作品がこのたび、佐取純子先生が主催なさる〈佐取純子モダンバレエスタジオ〉によって【LEGEND～「義経になった男」より～】と題して舞踊化されることになりました。

日本の歴史を描いたバレエといえば、ベジャールの「忠臣蔵」を思い出しますが、バレエの様式美と侍の魂を描いた「忠臣蔵」の様式美が見事に融合していました。

原初、人々は純粋な感情の発露として舞踊を生み出しました。現代のバレエは表現法も技術も精錬された芸術ですが、その根元には人間の熱い魂があります。

故郷を守るために命を捧げた、東北の(もののみ)たちの熱い魂をわたしは文章で表現しました。

【LEGEND】では、東北の(もののみ)たちの荒ぶる魂を、命を持った人間の肉体が表現します。

舞踊と物語が、どのように昇華して行くのか、お楽しみ下さい。

原作者 平谷美樹

〈平谷美樹氏(ひらや よしき)プロフィール〉

1960年久慈市出身。岩手県金ヶ崎町在住。大阪芸術大芸術学部美術科卒。2000年に「エリ・エリ」で第1回小松左京賞を受賞。SFから怪談物、ミステリー、時代物と幅広い分野で小説を精力的に執筆。近著に「風の王国(1～10)」「(ハルキ文庫)」「藪の奥一眠る」義経秘宝(講談社文庫)「慚愧の赤鬼 修法師百夜まじない帖 巻之二」(小学館文庫)など。

- 一 遠い響／沙棗の回想
- 二 流れⅠ／さだめ
- 三 北へ／黒い距離
- 四 まんだら／黄金浄土
- 五 合戦／火の山
- 六 流れⅡ／取り戻した顔
- 七 花／沙棗の想い

出演者

- 流れ・さだめ…………… 佐取純子
- 義経・沙棗…………… 中川雅寛
- 風…………… 佐藤裕子 青柳千里
- 黒い距離…………… 小関りり香 片倉彩萌 富田悠莉乃 齊かのん
- まんだら…………… 八巻千穂 樋口かのえ 遠藤梨香
- 合戦・花…………… 佐藤裕子 青柳千里 佐伯順子 小関りり香 片倉彩萌 八巻千穂 樋口かのえ 遠藤梨香 富田悠莉乃 齋かのん 遠山さやか
- 少女…………… 鈴木爽巴

あ・ら・す・じ

岩手県金ヶ崎町在住の小松左京賞作家平谷美樹さんが、2008年10月から約2年間にわたって、河北新報朝刊に連載した小説を改稿した作品です。大胆な解釈と想像力を駆使して、源義経の影武者の数奇な運命と奥州平泉の栄枯盛衰を描いた伝奇的な歴史小説の傑作です。

時代は平安時代末期。シトコロ(後の沙棗)という蝦夷が出自の男が主人公です。シトコロは被征服者としての運命を背負い、近江の国に生きていました。その頃、奥州平泉は藤原氏が支配し、金を資源に仏教への敬虔な婦依から上下貴賤のない社会を築いていました。金を資本に世の中を動かそうとする平泉の商人橋木(きちじ)信高が、平家の政権を打倒しようと、16歳の義経を鞍馬山から連れ出し、平泉で育て、頼朝とともに源氏の治世を画策します。その際、藤原秀衡に命を救われた義経に瓜二つのシトコロが、沙棗の名を与えられ、義経の影武者として生きていく運命になります。

肉親の愛情に恵まれなかった義経は、兄・頼朝の役に立ちたいと軍勢に加わり、戦功を挙げますが、猜疑心の強い頼朝は義経を利用するだけ利用して切り捨てます。義経は頼朝と心が通わずに乱心して自害し、沙棗は義経に成り代わって生きる運命を背負います。

有名な奥州合戦で、藤原一族は軍勢としては劣っていませんでしたが、戦で多くの無辜の民を犠牲にすることを避けるため、あえて慈悲深い滅びの道を選びます。頼朝を扶えさせるため、沙棗とその仲間、義経の郎従たちは、義経は死なずに北へと向かったという伝説を作ります。「義経の怨霊」に怯える頼朝は、戦いには勝ったものの、藤原氏が築いた文化や精神性までは支配できませんでした。以後、「義経の怨霊」は鎌倉幕府を脅かし続けます。主人公の沙棗は、その名の由来となった植物「沙棗」を探すために大陸に渡り、自らの人生を問います。